

開港から 近代都市へ

嘉永六年(一八五三)、浦賀沖にアメリカ東インド艦隊司令長官ペリー提督の率いる四隻の軍艦が現れた。これが、長く鎖国政策をとっていた日本が、開国に向けて歩み始めた第一歩となる事件であった。この当時の横浜は、戸数百戸ほどの平凡な漁村であった。

それから六年後の安政六年(一八五九)、日米通商条約によって横浜は開港、寒村は一躍近代国家へ飛躍しようとする日本の表玄関になった。

先進地域である欧米の物、人、情報のすべてが、横浜に上陸し、日本全国に広がっていった。横浜に住む人々は、日本で誰よりも早く欧米の文明に接し、その影響を受けることになった。「マドロス(船員)」、「ドロンケン(酔っ払い)」、「チャブ台(食卓)」という流行語が生まれ、それは「横浜ことば」と呼ばれていた。

横浜から日本全国に発信されたり、伝播したのは言葉だけではない。西洋文明のほとんどは、いったん横浜というまちに根づき、日本という気候風土に馴染んでから、各地に伝えられたのである。

その中には、写真、新聞などの通信メディア、パン、ビール、西洋野菜、石鹸などの食品や雑貨、ガス事業、電信事業、近代工場などの各種産業が含まれている。

また、明治五年には日本最初の鉄道として、横浜・新橋間に「陸蒸気」^{おかしやうき}が走り、二十二年には東海道線が全線開通、人と物の移動がさらに容易になった。

横浜は開港をきっかけにしてまちづくりが始められた都市であったため、住民には古いきたたりや生活習慣をかたく守ろうとする

人が少なかった。住民のほとんどは、世界各地から横浜を目指して流入する西洋文明を積極的に吸収しようとする人たちであった。「横浜っ子」となった住民は、ハイカラな気風の下で、開明的で国際的な気質を育んだ。現在もなお、横浜市民の多くが自覚している「横浜らしさ」の原型は、この時代につくられたのである。

明治二十二年に市制がしかれ、横浜市が誕生した。この当時の人口は一万六千人、戸数二万六千。すでに横浜は日本でも有数の大都会であった。

この頃の横浜は、貿易港として重要な役割を果たすだけでなく、軽工業が発達しはじめていた。そして日清・日露戦争の頃から、雑貨など横浜で生産された商品が海外に送り出されるようになる。「表玄関」として日本の近代化に貢献してきた横浜は、産業都市としての機能を定着させることで、新しい役割を担い始めたのである。

その後、軽工業に続き、沿岸部を中心に造船、化学など日本の近代化を推進する重工業が発展する。

大正三年第一次世界大戦が勃発、日本も参

◆この時代の年表

- 安政6(1859) 横浜開港
- 文久2(1862) 生麦事件
- 明治3(1870) 「横浜毎日新聞」発刊
- 4(1871) 廃藩置県、神奈川県に編入
- 5(1872) 横浜・新橋間に鉄道開通
- 22(1889) ●大日本帝国憲法発布
市制をしく
- 27(1894) ●日清戦争おこる
- 37(1904) ●日露戦争おこる
- 42(1909) 開港五十年記念祭
市歌・市章できる
- 大正3(1914) ●第一次世界大戦おこる
- 10(1921) 市内電車が市営となる

戦した。この大戦を契機に、参戦国ではあったが戦場とならなかった日本の工業は大きく発展、横浜の産業も未曾有の繁栄を謳歌した。大戦が終わり、日本経済は一転して不況に苦しむこととなる。そのさ中、関東大震災が発生、横浜ははかり知れない被害を受けた。その後「横浜の五重苦」の筆頭に数えられるこの天災は、開港から六十年余、順調に発展してきた横浜が初めて体験する試練であった。

横浜市民の証言

正確な情報が いちばんです

大久保喜八さん(78)



◆この時代の年表

- 大正12(1923) 関東大震災
- 昭和元(1926) 京浜第一国道完成
- 2(1927) 区制をしく。中、磯子、神奈川、保土ヶ谷、鶴見の五区が誕生
- 3(1928) 現在の横浜駅ができる

市営バス運行開始

- 5(1930) 山下公園開かれる
- 10(1935) 復興記念横浜大博覧会開催
- 12(1937) ●蘆溝橋事件、日中戦争始まる
- 14(1839) 港北区、戸塚区誕生
- 16(1941) ●太平洋戦争に突入する

根岸は江戸時代からの農漁村で、うちも親父の代までは漁業と畑をやっていました。

大震災は小学校六年生の時でね。うちは八人兄弟に両親・祖父母と家族が多かったんだけど、学校から帰ってきたら、みんなもう昼御飯をすませて昼寝をしようとしていたんです。そこで一人で御飯を食べていたら、やってきた。ドスンと地響きがしてグラグラッと揺れてね。あれはすごい音でしたよ。ちよつと形容しがたいです。

あわてて大黒柱にしがみついて外を見たら、近所の人たちがみんな庭の植木につかまわってね。電信柱はしななって、もう地面につきそうになっていた。でも、あの辺りは岩盤だったので潰れた家もなく、昼時を過ぎていたのとカマドが母屋から離れていたのが火事も出ずで、被害の点では非常に恵まれたですね。それでも裏山の崖が崩れて、生きた心地がしませんでした。その山ごしに見ると、関内の

【朝鮮人暴動の流言と迫害】

市内のほとんどが潰滅状態になり、火災と余震に襲われ続けた市民は不安な状態であった。この混乱のなかで夜に入ると、警察などによって「朝鮮人が井戸に毒を入れる・暴動を起こす」というデマが流された。警察は地域の治安を守るという名目で在郷軍人会や青年会などを母体にして、町内に自警団を組織させ、武器を貸与した。

政府は戒厳令を発動させ、軍隊を横浜にも派遣した。その軍隊や警察、自警団の中に朝鮮人を見ると理由もなく殺害するという行為に走ったものもあり、横浜市内だけでも多数の犠牲者を出してしまった。この事件の背景には一九一九年三月一日に起きた、朝鮮民族の日本の植民地支配からの独立運動（三・一独立運動）等朝鮮民族の抵抗に対する日本人の恐怖心と差別意識があった。

（『横浜の歴史』中学生用 横浜市教育委員会より）



学校が焼けたため、学舎は“青空教室”横浜開港資料館所蔵

方はものすごい煙りが立ってんです。すぐ火事が起こって、疾風が起こって、旋風が起きて、あつという間にみんな燃えちゃったんですね。津波は来ませんでした。近くの海岸には、毎日、大きな材木と一緒に何十体も遺体が流れつきました。

それから、南の海越しには横須賀の軍港が見えるんだけど、あそこも燃えている。その灰が風に乗って、どんどん降ってきました。その後、どろどろに溶けた蠟（ろう）の固まりが横須賀から流れてきたので、それを拾って竹筒に流し込んでローソクをたくさん作りましたよ。夜は真っ暗闇でしたから。

大地震の後、半月ほど続いた余震もものすごくつね。うちは隣は広場だったので、そのケヤキの根元にみんな避難して、あれで一週間くらい暮らしましたかねえ。家には怖くて入れないんです。その後は、それぞれの家の庭に蚊帳をつつて、その中で寝ました。

関東大震災から昭和初期の繁栄

大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災は、この日だけで二三七回、翌日には九一回、九月中の震動数七十二回という大地震であった。地震は市民を殺傷し建物や道路を破壊しただけでなく、火災を発生させるなど、被害は広範囲におよんだ。そして大震災は、開港後発展を続けていた横浜に潰滅的な打撃を与えた。全人口約四五万人のうち死者・行方不明者二万三三三五人、その他重軽傷者などを加えると約三九万人、罹災関係総人口は四一万人に上っている。被災面積は、一三〇九万㎡で、これは横浜全市のほぼ八割におよぶ。

関内の方から、怪我をした人たちが親戚を頼ってたくさん逃げてきたんだけど、その人たちが、食べる物が何もないから、通りすがりに畑のものみんな持ってっちゃってね。親父は、「うちの畑のもので皆さんが助かるなら結構じゃないか」といってました。そのうちに外国からの援助で外米などの配給があったので、飢えずにすみましたけどね。余震も怖かったけど、もっと怖かったのはデマ。「朝鮮人が暴動を起こした」とか「井戸に毒を入れている」というデマが、しばらくしてから青年団や町の世話人などから伝えられて、すぐ自警団がつくられ、大騒ぎでした。うちは、根岸の競馬場の側に畑があって、親父はそこへ行くのに日本刀を差して行きましたよ。後から考えれば馬鹿らしい話でも、電気も来ない、正確な情報も入らない状態の中で、ほんとはしく聞かえるんですね。どうしてそんなデマにみんな簡単にひっかかっ

被害も大きかったが、焼け野原から立ち直るのも早かった。蚕糸貿易復興会、横浜市復興会が結成され、一年後にはほぼ八割が復興する。大震災からの復興とともに、広い視野に立った都市計画と都市基盤の整備も活発に行われた。大正初期から始まった埋立事業も進展、湾岸地区は京浜工業地帯として生まれ変わっていく。

これに伴い、横浜の軽工業、重化学工業も一大飛躍を遂げる。開港以来長らく商業港として発展してきた横浜港は、商工業港へと変貌した。しかし、昭和初めの大恐慌で横浜の工場は火の消えたようになる。どん底の経済に刺激を与えたのは昭和六年の満州事変であった。日本経済は軍需景気によって息を吹きかえす。

たかというところ、当時はお隣の朝鮮を日本は植民地にしていましたからね。そして威張ってひどいことをする日本人が多かったので、みんな何となく後ろめたな気持ちがあったんです。その気持ちを逆に利用して悪いことをした人がいたんですね。その結果、集団ヒステリー状態に陥った人たちによって、各地で罪もない人がたくさん殺されてしまったわけですから、デマの被害の方が地震より何倍も怖いんですよ。

僕はこういう経験があるもんだから、老人会や町内の防災訓練の時などに、地震のことをいろいろ研究して話をしているんだけど、最近では若い人の関心が低くて、防災訓練に出てこない人が多いんですよ。でも知識がないと、いざというときあわてて、またデマにひっかかたりしますからね。正確な情報、これが一番です。

（神奈川県白楽在住）

伊勢佐木町 今昔

黒沢 カさん(88) みつほさん(84)



空襲後の焼け野原

【横浜を焼け野原にした空襲】

横浜は昭和17年4月18日から20年8月13日までに25回の空襲を受けている。このうち20年5月29日の大空襲で横浜は壊滅した。これらの空襲による横浜全体の被害状況は、市街地焼失面積が全体の41%、罹災人口が全体の38%、2万人に近い市民が猛火の中で死亡した。

「横浜には十五の歳に来たんです。震災は十八の時だったね。実家は茨城県。イトコが伊勢佐木町で紳士物の洋服屋を開いていたので、住み込みの小僧として来たの。」

小僧生活は大変だよ。子どものオムツの洗濯から掃除まで、なんでもやらされた。御飯はいつもすえた臭いのする残り御飯ばかり。

夜は十一時、十二時過ぎまで人通りがあったから、店をしまつて風呂に行くのは、いつも夜中の二時か三時。七時には起きてすぐ開店給料? そんなものはないよ。休みは数入りの時くらい。その日は、新しい着物とゲタと

五十銭もらつて、浅草で映画だよ。神奈川の人みんな伊勢佐木町に遊びに来たけど、こっちはやっぱり浅草だね。震災後しばらく荷車引つ張って露店を出して、その稼ぎで千円貯めたんだけど、知らない間に主人がみんな遊びに遣つちやつたんだ(カさん)

「昭和七年にあたしが同じ郷里から嫁いできた時は、だからフトン一枚、ハシ一本ないところに来たわけね。当時は世界恐慌のあと不景気が続いてたんだけど、この町だけはすごい賑わいだった。あの頃、戸塚でも平塚でも、ここに来ないと物が買えなかつたからね。鎌倉、小田原あたりからも来たの。当時は伊勢佐木町といえは都会も都会、大都会だったのよ。とにかく、店の前の通りを向こう側に渡つたら、帰ってくるのが大変なくらいすごい人出なの。朝から『いらっしやい、いらっしやい』と大騒ぎだね。」

震災後に大家さんが四間間口の長屋を建ててね、二階建ての瓦屋根が続く、それは立派なまち並みだった。家賃は五十円。九年に独立したんだけど、この五十円を払うのが大変でね。月に百五十円、二百円稼ぐのが精一杯で、食うや食わず、欲しいものも我慢する毎日だった。大晦日は朝五時まで店をやつたわ。借金取りがズラツと店先に並んでいるんだもの。その頃の楽しみは、働いて家賃を無事払うことだけ。昭和十三年によく店を買えたので、さあ頑張ろうと思つて大晦日にお金を数えたら、もう支払いは全部すんだのに、いっぱいお金が残つたの。いままでやつて、あの年だけね、お金が残つたのは。あの時はうれしかったあ。

昔は『やまとり』という歩合で働く人たちがいて、その頃は、暮れになるとうちにも十人くらい『やまとり』の人たちが来たの。昔はいちいち客と値段の駆け引きだから、えらい騒ぎだったけど、面白かった。

そのあとは戦争が始まつて、どんどん景気が悪くなつて。鎌倉に疎開して、終戦後戻るのが遅くなつていたら、強制疎開で立ち退きにあつたうちの店は、結局ただで取られちゃつた。そうしたら町内会長さんが気の毒がつて、いまの五丁目の土地を確保してくれたのね。でも当時は一人一四坪と決められていたから、二間間口の店しかつくれなかつたの。そのまま戻れない人も多かつたわね。すぐ裏が米軍の接収にあつて、飛行場ができてやつてね。商売は古着しか売れるものはなかつたけど、なんでもよく売れたわ。自分の着物もどんどん売つてしまつたくらい。昭和三十五年くらいまではよかつたけど、あとはだんだん下り坂になつて、いまはまるっきりね。昔のことが嘘みたい。

いまでも朝一時に起きて、直しの針仕事。まだ眼鏡なしてやれるのよ(みつほさん)

（中区伊勢佐木町在住）

◆この時代の年表

- 昭和16(1941) ●太平洋戦争勃発
- 17(1942) 初めての空襲がある
- 18(1943) 南区誕生
- 19(1944) 学童疎開始まる
- 西区誕生
- 20(1945) 大空襲で横浜中心部全滅
- ポツダム宣言を受諾して降伏
- 21(1946) ●日本国憲法公布
- 六三制教育スタート
- 23(1948) 金沢区誕生
- 24(1949) 日本貿易博覧会、現在の反町公園で開催
- 25(1950) 横浜国際港都建設法公布
- 28(1953) 第一回みなと祭開催
- 33(1958) 開港百年記念祭開催

戦災と接収の時代

昭和十六年(一九四一)、第二次世界大戦が勃発、十九年からは編隊を組んで来襲した米軍機が主に軍事施設を空襲、やがて目標は市街地に拡大された。

日本最大の港湾都市であり、工場地帯の多い横浜も目標となる。横浜はたび重なる空襲によって、文字通り焦土と化した。

昭和二十年(一九四五)八月、ポツダム宣言の受諾によって空襲の恐ろしさはなくなつた。だが次には進駐軍の接収が市民を苦しめることになる。進駐軍は戦災をまぬがれた建物などの明け渡しを次々と命令、山下公園、根岸競馬場など中心部はほとんど接収、全国の土地接収面積の六二・二七%を横浜が占めた。

昭和二十五年十月、市の人口は約九五万人

留守家族を 守るのに 必死だったね

山田歌吉さん(90)



焼け跡に建ち並んだカマボコ兵舎

【広範囲に及んだ米軍の接収】

占領軍の進駐と同時に軍事接収が行われ、20年末には、接収地は市の市街地面積の27%に上った。関内の焼け跡や山下公園には、カマボコ兵舎が建ち並び、山手方面の住宅94戸も接収された。また、空襲で大半が破壊された港湾施設の残りが接収され、横浜市の経済基盤に大きな影響を与えた。

にしたのが、もう六十年以上続いているわけ。戦災の時は、別所に引越していたの。本土への空襲が激しくなって児童疎開が始まったんで、子どもを手放すのはつらいし、可哀そうだと思ってるね。当時の上大岡は、駅からうちまで家は三軒くらいしかなかったから、空襲なんて関係なかったんだよ。四月の空襲の時は、たまたま子どもが熱を出したんで仕事を休んだの。次の日に老松小学校の辺りに行ってみたら、死体がいっぱい並べてあった。日の出町の駅にも死体がたくさん積んであったね。

僕はね、生まれは鎌倉なの。父親は鎌倉の大地主。震災の時は十九歳で、就職のための健康診断を受けに野毛山の病院に行ってたわけ。そこへあの大地震なんだよ。

僕はほうほうの態で鎌倉へ帰ったんだけど、相生町の姉の家に行ってた母親が家の下敷きになってね、焼け死んじゃった。それで、僕がびっくりしちゃって、悲しくて江の島に行つて自殺しようとしたの。江の島で最後の写真を撮り、家に送つてから海に飛びこんだんだけど、気が付いたら岸にあがってんだよ。考えたら、僕は水泳の選手だったんだ。

それで就職はよして、横浜の元浜町に地所があったし、僕は文学が好きだったから自分の本をつくろうと印刷屋を始めたの。仕事は職工さんにまかせて、僕は青年団をこさえてね、一所懸命やってたから、その縁で注文もとらないのに仕事はどんどんきた。それで三十代で関内の印刷組合の組合長になったんで

す。

そのうちに戦争になって、印刷所は平和産業だから資材供出させられてね。組合長が率先して供出してくれといわれ、機械やなんか全部供出して印刷所をやめたんです。その後、大政翼賛会の仕事を頼まれてね。壮年団を組織し、中華街の生ゴミを集めて横浜公園でブタを飼つたり、農業の先生と農家を回つて多収穫の方法を講義したり、夜、電気をつけている家がないか見回つたり。何とか留守家族を守らなくてはと必死だったね。忙しくて、家で御飯を食べたことはなかったよ。僕が長寿なのは毎朝水をかぶっているからだけど、きっかけは兵隊さんへの慰問袋。これがだんだん買えなくなったので、代わりに野毛山のお不動さんで兵隊さんの無事を祈つてみんな水をかぶることにしたんだ。ところがこれが、夏でもひどく冷たくてね。結局、続かなかった。それで僕一人だけで家で続けること

それから、たびたびの空襲で伊勢佐木町辺りもすっかり焼け野原になった。市の財政も逼迫していたので、何とか伊勢佐木町を元通りにして、商店主さんたちに戻ってきてもらえば税金も入るようになるだろうと思って、三千人に動員をかけて後片付けを始めたの。だけど、みんな腹は減ってるし、勤労奉仕だからはかどらなくてね。焼けトタンがどうにか積み上がっただけ。間もなく、戦争に負けて進駐軍がやってきたと思つたら、ワーツとブルドーザーでなにかも片付けちゃって、飛行場をつくっちゃった。あれを見て、これじゃ日本は負けるわけだと思つたね。そこで、これから日本が没落しないためには教育に力を入れるしかないと思い、以後はPTA会長を引き受けて学校づくりに走り回つたり、地域活動に力を入れてきたんだよ。

昔はここもきれいな水がじゃんじゃん湧いてたんだ。夏にはホタルの群れが、それはきれいでねえ。あんな姿はもう見られないね。

(南区別所在住)



焼け跡のガレキの中で食事をとる横浜市民「毎日新聞社提供」

になり、戦時中(昭和十九年)の九三・三%までになった。そしてこの年、国際港都建設法が公布され、国の援助によって港湾の拡張、高速度鉄道、大緑地帯、産業地帯、住宅地帯の実現が計画されるようになる。また同年六月に勃発した朝鮮戦争は、いわゆる特需をもたらし、日本経済復興のきっかけとなった。横浜の工場や商店も戦後初めての活況を迎える。そして翌二十六年、日本はサンフランシスコで平和条約に調印、これによって国際社会への復帰を果たした。この年、横浜港の管理権が市に戻り、二十七年には大磯橋の接収も解除された。こうして徐々に戦災の傷痕をいやしつた横浜は、新たな発展へ向かっていく。

プレハブ校舎 が消えた日

瀬之間美和さん(27)



校庭に建つプレハブ教室

【昭和35年にプレハブ教室初登場】

宅地の開発と流入人口の増加に伴う児童・生徒の増加により、教室数が不足し、その対策として昭和35年にはプレハブ教室が登場する。プレハブ教室数は、特に40年代にはいるといわゆる周辺区で急速に増加し、小学校では45年に452、中学校では49年に236に達する。

うちは先祖代々ここに住んできて、私で三代目です。

このあたりが開け始めたのは昭和三十年代からですけど、開発が一気に進んだのは、やはり四十年代に地下鉄が開通してからですね。交通の便のすごくいいところになって、次々に団地ができ、よそからどんどん人が入ってきて、転校してくる子が増え、それで私が入学した永野小学校も、たちまち横浜一の過密校ということになったんです。

小学校入学は四十七年かな。創立百周年の時の記念誌を見ると、当時の児童数二千二百名、学級数五十ということで、教室の数が足りなくて、プレハブ教室が十四棟も建っていたんです。校庭の半分をプレハブ校舎が占めていたので、朝会を二回にわけてやったり、校内の事故も結構あったみたい。兄も、子ども同士でぶつかって、耳に怪我をしたことが

あったようですよ。もちろん運動会もありませんでした。でも、私は小さかったし、入学したときからそんな状態だったから、別になんとも思いませんでしたけど。

プレハブ教室では、二年生のとき勉強しました。その時は一クラス四十五人くらいで、八クラスありましたね。当時はダルマストーブで冬寒かったのを覚えているけど、特に不便は感じませんでした。校庭ではドッジボールのような場所を取る遊びは禁止されていて、鉄棒はいつも取り合い。でもみんなやりくりして、喧嘩もせずにうまく遊んでいたような気がします。

その後、プレハブ校舎を解消するため、四十八年から野庭小学校、日眼山小学校、永谷小学校、相武山小学校とたて続けに分校が誕生しました。

中には、日眼山小学校のように、学校が

◆この時代の年表

- 昭和37(1962) 横浜文化体育館、港の見える丘公園ができる
- 東京都の人口が一千万人を突破
- 38(1963) 根岸湾埋立第一期工事完成
- 39(1964) ●東海道新幹線全線開通
- 東京オリンピック開催
- 40(1965) 第三京浜国道開通。横浜に初めてスモッグ予報発令
- 43(1968) 人口二百万人を突破
- 44(1969) 旭、緑、港南、瀬谷の四区が誕生
- 45(1970) ●大阪で日本万国博覧会開催
- 47(1972) 市営地下鉄、上大岡・伊勢佐木長者町間営業開始
- 48(1973) ●オイルショック

高度経済成長から安定成長へ

戦災、疎開などによって一時六〇万人に減少した人口が、一〇〇万人に回復したのは昭和二十六年である。昭和三十年代後半、これまでのテンポが変わり人口が急激に増えはじめる。昭和三十三年には一二五万人だったが、三十七年には一五〇万人を、四十三年には二〇〇万人を突破した。

横浜の人口急増の時期は、日本経済の高度成長の時代を迎えた。横浜では、下水道や公園などの生活基盤や鉄道や道路などの都市基盤の整備、そしてバランスのとれた都市づくりをめざした都心・副都心・地域拠点のまちづくりなどが進められる。

建ったところが区境で、校舎は港南区、運動場は戸塚区という具合にわかれていて、両方の学区から先生や生徒を集めたんだけど、戸塚区ではランドセルを使っていなかったり、授業の進め方などが違っていたので、両方を調整するのが大変だった例もあったそうです。

長の時期と重複していた。この時期、産業・人口の東京への集中が進み、東京からあふれた人口が横浜を含めた周辺都市へ定着することになった。いわゆる「東京のベッドタウン化」である。

横浜では、丘陵地帯(郊外地域)を中心に大規模な宅地開発が行われ、横浜の都市としての性格に大きな影響を与えた。郊外部の山林や農地は大幅にかつ急激に減少し、旧来からの市街地と郊外の住宅地とに生活圏が二分される。

また、人口の急増により、学校・保育園などの教育施設や下水道・道路・公園などの生活基盤の整備に追われることとなった。

新しい市民の急増は、市民意識の多様化をももたらした。東京に通勤・通学する市民は買い物や文化活動の面でも東京志向が強く、市民意識が弱い傾向があった。また、新住民の多くが横浜以外の都市の出身者であることも、こうした傾向を強めた。

人口の急増は昭和四十八年のオイルショックによって歯止めがかかる。しかし、人口はその後も増え続け、昭和五十三年には大阪を抜き我が国第二位となり、昭和六十年には三〇〇万人を突破した。

二度のオイルショックを経た日本経済は安定成長の時代を迎えた。横浜では、下水道や公園などの生活基盤や鉄道や道路などの都市基盤の整備、そしてバランスのとれた都市づくりをめざした都心・副都心・地域拠点のまちづくりなどが進められる。

それから周辺住民の人たちへの説得も、すんなりいく学校もあればなかなか話が進まない学校もあって、決められた開校日に間に合わせようと、先生方やPTA役員さんたちは必死だったみたいです。当時父は、PTA関係の仕事に携っていましたので、その思い

出話をいまでもよくしています。

新しい分校が次々にできて、四年生になる時、いちばん仲のよかった子が転校して行ったのが寂しかったですね。でも四年生になって初めて全校運動会を体験した時はうれしかった。それまで公園で学年ごとに分かれて行っていたので、運動会とはこういうものなのか、と思つてね。入学した時は別に狭いともなんとも思わなかったんだけど、プレハブ校舎がなくなつてみて、校庭が広いなあと思つた覚えもあります。

父も昭和のはじめ頃に永野小学校に通つていたんですが、その頃はまだ木造平屋校舎で、

一学年に二クラスしかなかったのが男女共に六年間ずっと一緒なんですね。だから、みんな仲がよくて、いまだに二年に一回クラス会を開いているんですよ。私たちはクラス会は全然やっていません。人数が多くて付き合ひも浅いし、みんな散り散りになつちやつてから。

私は五年間、カナダに語学留学していて最近帰つてきたんですが、向こうは楽しみながら学ばないこと、枠にはめない教育方針なんです。それが日本の学校と違つて、すぐよかつた点ですね。いろいろな国の友人もたくさんできましたし。(港南区上永谷在住)



渋滞にまきこまれ身動きがでない市電

新しい時代へ 向けて

昭和六十一年からは過去最長の超大型景気が続き、この間、東京の一極集中にさらに加速がかかった。横浜のベッドタウン化は一層進み、通勤・通学者の、東京を中心とした他都市への流出は、横浜の活性化、経済的自立に多くの問題を引き起こしている。このため、東京への過度な依存状況から脱し、首都圏の中核都市として自立することがますます重要な課題となり、横浜の個性を生かし都市として自立していくことが一層求められるようになった。

一方、地球規模での環境問題が顕在化してきたことよつて、身の周りの生活環境を見直そうとする動きがおきてきた。また自由時間の増大などにより、暮らしのゆとりや豊かさを積極的に楽しもうとする市民ニーズが高まり、ゆとりや安全性が従来にも増して重視されるようになった。

横浜市では、こうした社会の変化に対応するため、平成二十二年を目標年次とした新総合計画を策定し、平成五年度に発表する予定である。市民生活の視点に立つてつくりだしているこの計画は、二十一世紀に向けて、豊かで安心して暮らせる市民生活の実現をめざしている。



横浜はいま、21世紀に向けて飛躍を始めている

◆この時代の年表

- 昭和49(1974) 大黒埠頭連絡橋完成
- 50(1975) ●沖縄国際海洋博覧会開催
- 53(1978) 人口二七〇万人となり、全国第二位に。横浜スタジアム完成
- 56(1981) 「よこはま21世紀プラン」策定
- 57(1982) ●東北・上越新幹線開業
- 58(1983) 「みなとみらい21」着工
- 59(1984) 市会が「非核兵器平和都市宣言」を行う
- 60(1985) ●つくば国際科学博覧会開催
- 61(1986) 戸塚区が栄区、泉区、戸塚区に分区
- 平成1(1989) 開港百三十年横浜博覧会開催、市制百周年。ベイブリッジ開通
- 3(1991) 国際平和会議場開設
- 5(1993) 市営地下鉄「新横浜〜あざみ野」間延伸